

十二月二日

穏やかな冬日和の朝だ。

藤沢の高橋さん一家より御手紙いただく。御主人の健康状態等気になりながら、一家の家づくりは何の力も出せず心苦しう思っていた。御手紙はチョツと早目のクリスマス・カード形式で、開いたら、音楽がこぼれ出てきた。一家の皆さんの元氣そつな写真も同封されていて、私としては、かえって心苦しさに胸がつまる思いがした。困っている人達は何の力にもなれていない。相変わらず非力だ。家の問題に本当に苦しんでいる人達は、いわゆる建築家に設計料らしきを満足に払いたくても払えない、のが現実なのだ。何とかして差し上げたいのはヤマヤマなのだ。何か答えはないものかな。来週末お目にかかれるよう返事を書く。

十二月三日

十七時半NPOピースウインズの根木さんと研究室で会う。根木さんはカンボジア・プノンペン「ひろしまハウス」の建設、運営に強い関心を寄せて下さって、色々力添えをしてもらっている。今日は「ひろしまハウス」の一部を使用可能にする為の資金集めの方策として、彼女が考えてくれた案をフォローする為の会合だった。カンボジアの日本大使館も心配してくれているようだ。私の研究室としても、根木さんの意欲に応えようと四名のスタッフを1週間「ひろしまハウス」工事用図の作図にかかり切りにして、彼女の気持ちに応えた。野本、尾澤、早崎、三好シユターク

の四名である。勿論この努力を無償の行為だと、それを知らしめたいとしているわけではない。これ位の事はやる。当たり前だ。やりたいからやっている。私に時間を与えてくれればナア。「ひろしまハウス」の大ドローイングを沢山描いて、それを投げ売りして、建設資金の足しにするんだが。この時間は無くても、時間欠乏症であつてもやってみようかと迷う。何はなくても、金の欲しさよ、だな。資本主義社会の定理から自由になる事は・・・あり得ないのである。「ひろしまハウス」pプノンペンで、私達が試みようとしている事の一つは、税金の集積で作られる公共建築ではなく、資本投資の対象としての商業建築でもない。個人個人のお布施が集合して出来る、共同の意志の固まりとしての建築のイメージなんだけれど。マ、そんな事今の時代に言つても解られないだろう。ともあれ、根木女史の意欲と意志には応えたい。人は気持ちだけで動く時がある。

十二月四日

驚く程に時間が経つのが速い。早朝四時半目が覚めてしまい、独人、大テーブルの席に灯りをつけて座っている。確かに年を取るって現実には酷薄なものがある。しかも、今暮らしている東京そのものつまり都市そのものの、の時間に同様の性格がある。東京は急速に老化した資本主義社会の様相を露呈して、バラック状の廃墟へと凍結している最中にある。都市に満ち溢れている哀切さは自身の身体が内に溢れ返させている同類の反映なのだろう。それにしても辛い時代になったものだ。私の最初の本のタイトルは「バラック浄土」であつた。直観だけで生きていた頃の典型的な思い付きの産物タイトルであつた。が、このタイトルは今の時代にむしろピッタリな感じがしないでもない。途切れ途切れではあ

るが「ひろしまハウス」の作図を進めると、ある感慨に辿り着く。この建築はカンボジアの首都プノンペンに建てるよりも、むしろ東京に建てるべき建築ではなかったか。東京の今にこそ、この建築は立ち現れるべきものではなかったか。

広島の木本君に厚生館愛児園から依頼された二つ目のオブジェクトに関して、少々長い手紙を書く。